

オノウエ印刷 [印刷会社]

Onoue Printing Inc.

印刷では出せない、
でも、写真家が望む色を出してあげたい。
そういったジレンマがDreamLabo 5000 なら解消できる。

長野県諏訪市に本社を構える株式会社オノウエ印刷は、卓越した製版技術と印刷技術により高い評価を受けている印刷会社です。

創業は1945年、70年の歴史のなかで常に印刷品質を追究し、顧客の多様なオーダーに高いレベルで応えてきました。ポストカード印刷の通信販売を業界に先駆けて行ない、品質第一という考えから印刷のすべてをFMスクリーンで運用するなど、先進性と柔軟性を持ち合わせていることが特徴です。

印刷表現に対して厳しい評価の目を持つオノウエ印刷は、キャンソンのハイクオリティ・オンデマンドプリンター DreamLabo 5000 をどう評価しているのでしょうか。

印刷通販課 課長 中村由希子さん、工場次長 花岡秀明さん、そしてふたりとともにテストに参加したデザイナーの宮坂 淳さん(snowfall inc.)の3名に話を聞きました。

— DreamLaboの出力の色について、どのように感じましたか？

宮坂 • DreamLaboを使って、写真家・古見きゆうさんの写真をテスト出力させていただきました。写真はすべて海中写真で、いつものオフセットでも職人的なプリンティングディレクターの凄技で実現できていますが、ふつうはこれを印刷で再現するのはハードルが高いですね。

海の青のグラデーションはシアンとマゼンタで作られていますが、紙白から青が生まれるところと、さらに濃くなってマゼンタが入りはじめるときにジャンプが起きる。それをどうきれいに出すかが難しい。

花岡 • DreamLaboなら海中写真はお手のものですね。宮坂さんのおっしゃるように、海の青のグラデーションを印刷で表現しようとするときに起きるジャンピングは、薄い青から濃い青に移る際の間色がCMYKにはない色だからなんです。印刷ではそれを目立たないようにするためにイエローを入れたりするのですが、そうすると色が濁ってきてしまいます。

DreamLaboではそうしたストレスなく、出せるのがいいですね。CMYKでは色が途切れてしま

うところが、きれいにつながっています。

宮坂 • 海の薄い部分、薄い黄色から青へのグラデーションがきれいですね。海中写真では、海のようになだらかさがほしいところと、岩場や生物のようにシャープさが欲しいところがあるので、そうした相反するものが並んでいてもどちらもきれいに色が出ています。

花岡 • 写真がシャープに見えるのは、色数が多く、階調が豊かだからでしょうね。階調が豊かだと写真に奥行きが出ます。

写真家とプリンティングディレクションをしていくなかで、写真家の方からしきりに言われるのはこの「奥行き」なんです。変な話ですが、色が合っている、合っていないではなく、写真が持っている空間を表現できるかどうか。そこで一番重要なのが「奥行き」感です。

奥行き感を出すには、全体のコントラストを上げていくわけですが、CMYKの狭い色域、狭い階調でコントラストを上げていくと、当然、シャドウはつぶれていきますし、ハイライトは飛んでしまう。調整にも限界があります。

DreamLaboはCMYKに比べて、より豊かな

CLIENT Interview

DreamLabo 5000



階調を持っているので、そのぶん、写真にパース感が出て、シャープに仕上がるのだと思います。

これまでは、たとえば風景の写真なら、風景の手前、中間、奥の各段階で明るさを部分的にレタッチしてコントラストを上げていたのですが、DreamLaboならそうしたレタッチを加えなくても、そのまま出るとは思いませんね。

中村 • 写真家のデータが、そのまま、きれいにらせるというのはしくみとしてもとてもわかりやすいですね。

弊社ではプロのフォトグラファーの写真集のほかに、一般の方の自費出版などの写真集も多く手がけているのですが、基本的にフォトグラファーの方には「自分で作った色をそのまま出してほしい」という要望があります。

多くの方は、仕上がりの見本としてインクジェットで持ってこられるのですが、CMYKの色表現には限界がありますから、完全に同じ色を再現することはできません。印刷に詳しくない一般の方に、「RGBの色がCMYKの印刷では出せないことがある」ということを理解していただくのは難しかったんです。印刷では出せない、でも、お客



さまの希望を叶えたい、表現したい色を出してあげたい……そういったジレンマが DreamLabo なら解消できると思います。

花岡 • インクジェットのプリントに対しては、十数年、悔しい思いをしてきたんです。写真家の方から、「印刷よりもインクジェットのほうがきれいだよね」「印刷だから仕方がないよね」と言われつつつけてきましたから。ライバル心というわけではありませんが、その悔しさがバネになって、CMYKでのいろいろな写真表現力を磨いて勝負をしてきたんです。そこにDreamLaboが加わると、もっと広いフィールドでプリントを高みに持っていきませんかと思えます。

DreamLaboのポテンシャルに、オノウエ印刷の製版技術を活かせば、さらに上を目指すことができるはずですよ。

— DreamLaboの出力の質感についてはどのような印象を持たれましたか？

花岡 • 印刷用紙はインキが乗った部分に質感の違いが出ますが、DreamLaboの紙にはそうした変化が少ないことが特徴ですね。最近の印刷では平滑度の高いコート紙よりも風合いのある微塗工紙が使われることが多いのですが、こうした紙ではインキが乗った部分に光沢感が現われます。こうした点が人気の理由だと思うのですが、DreamLaboの用紙では、ラスタタイプがこれに近いのではないのでしょうか。

宮坂 • DreamLaboで使うことができる紙は、現状では確かに多くありませんが、それ以上に、ペラ丁合ゆえに「折」を考える必要がないことに、DreamLaboの魅力があるのではないのでしょうか。印刷なら8ページ、16ページといった「折」の単位でしか、別の紙を差し込むことができませんでしたが、DreamLaboではどこにでも紙を挟むことができるので、デザイナーにとって新しい演出が手に入るんです。写真の前にトレーシングペーパーを入れたり、メタリックな紙をいれてみたり……いろいろな質感が入ってくることで本はもっとおもしろくなりますし、モノとしての魅力が上がりますよね。

中村 • 予算や求める色、質感に合わせて、DreamLaboとオフセット印刷を使い分けてもらえたらいいですね。弊社の印刷はすべてFMスクリーンなので、網点の作り方もDreamLaboに近いですから、色の質感も近いかたちに仕上がります。

花岡 • 弊社が2003年から一貫してFMスクリーンを採用しているのは、とにかく写真をきれいに出すためです。写真集の印刷を多く手がけている私たちにとって、一番目標にしているのはプリントや紙焼きです。粒子が細かく、階調も豊かで色もあざやか。そこにいかに印刷を近づけるかというなかで、当然のように網点を細かくしていくという発想になり、同時に彩度を上げてい

く方法を考えた結果、FMスクリーンにいっききました。

「オノウエさんはデジタルデータの印刷がうまいよね」と言っていたのですが、FMスクリーンはデジタルデータとの相性がいいからだと思うんです。いま、写真家のかたはみんなインクジェットプリンタで出力を作りますが、インクジェットの出力物をルーベでぞいてみると、点の拡散方式、点のつきかたがFMスクリーンそっくりなんですね。インクジェットプリントはデジタルデータをターゲットに開発されていますから、写真家の方の出力とFMスクリーンによる印刷の仕上がりは近くなる。その点を考えても、弊社のFM印刷とインクジェット方式のDreamLaboもまた相性がいいと思えますよ。

紙の質感を選べるというのは、印刷のおもしろいところではあるのですが、こと写真に関して考えると、プリントに使う印画紙だって種類はそれほど選べませんよね。

DreamLaboは、いわば写真集の王道を行くべきものだと考えていて、用紙の選択肢は限られているけれど写真をとにかくきれいに見せるもの。対して、印刷は手触りや質感、トータルパッケージを目指すもの。目指しているところが違う。「写真をきれいに出す」という王道のスタイルで考えるなら、紙がそれほど選べないことはハンデにならないと考えています。

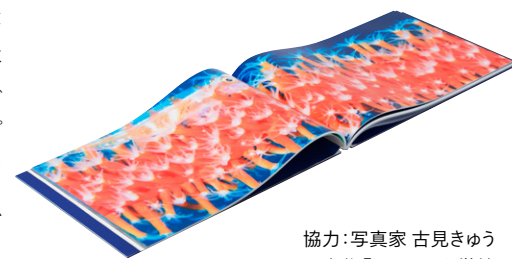
宮坂 • 確かにそう考えると、製本する必要もないのかもしれませんが、たとえば、DreamLaboで20枚プリントして、それを箱に入れて販売するとか。売場所も本屋や展示会場ではなく、インテリアショップなどでもいいでしょうね。

これまで作家がプリントして、20部くらいしかつくれなかったものが、DreamLaboを使えばもっと手軽に、大量に作れるようになる。そうした活用方法もありそうです。

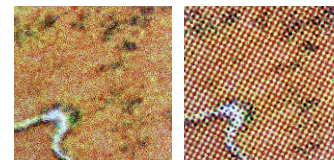
中村 • 一般の写真家の方が写真集をオフセット印刷で作るためにはいくつものハードルがあるんです。「紙はどうしますか?」「RGBの色はCMYKだとどうなりますか?」「製本はどうしますか?」「ページ数はいくつにしますか?」とひとつずつ決めていく必要があるからです。一般の方は紙や製本に関してそれほど詳しくありませんから、印刷のように紙の選択肢が多いということが必ずしもいいことばかりではありません。

DreamLaboなら「色見本のインクジェットプリントと同じように出せますよ」ということができることは大きなメリットです。同じデータであれば同じように出力できるので、色校正に合わせて本番の印刷を調整するというような時間も短縮できます。空いた時間を写真家の方は編集や構成に使えるようにもなりますよね。印刷であれば事前に細かく決めておかなければならない造本設計やページ構成は、DreamLaboを使ったブックオンデマンドなら後から考えられます。ページ

DreamLabo 5000
CLIENT Interview

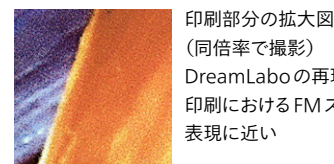


協力:写真家 古見きゆう
写真集「WAO!」小学館



FM

AM(175線)



DreamLabo

印刷部分の拡大図
(同倍率で撮影)
DreamLaboの再現は
印刷におけるFMスクリーンの
表現に近い

数も折を考えずに自由に決められますから、写真集としての表現の幅も広がるんじゃないかと思うんです。自由な発想をそのままかたちにできるDreamLaboを使うことで、いろんな本が出てくると思えますし、本づくりのチャンス自体も増えてくるのではないのでしょうか。



中村由希子
Yukiko Nakamura
株式会社オノウエ印刷
印刷通販課 課長



花岡秀明
Hideaki Hanaoka
株式会社オノウエ印刷
工場次長



宮坂 淳
Atsushi Miyasaka
snowfall inc.
デザイナー

株式会社オノウエ印刷／長野県諏訪市。1945年に創業。高い製版技術と印刷技術を生かし、写真集や画集等のビジュアルを中心とした印刷物を数多く手がける。